

# 行政 情報

Administrative Information

#01

## きれいで快適な北海道を目指して 道内旅行中の「ごみ」に関する調査結果の概要

豊かな自然環境を有する北海道においては、我々道民はその環境を次世代に引き継ぐための取組を着実に進めていくことが求められていますが、北海道を訪問する方々にも道内に気持ち良く滞在していただくと同時に、美しい環境の維持保全のために一定の役割を担っていただくことが必要になっています。

これまで、北海道内各地では各自の居住地におけるごみの排出ルールが周知徹底されるとともに、道内移動中に発生するごみについては居住地に持ち帰る運動（ごみ持ち帰り運動）などにより、各地での環境美化が進められてきました。

この間道内各地では、ごみ回収の有料化や分別回収の徹底などが契機となって、公園や道の駅等の公共施設におけるごみ箱の撤去が進められました。他方、北海道を旅行した方々からは関係機関に対して「旅行中にごみの捨て場所がなくて困った」との意見が寄せられるとともに、捨て場所のないごみが不法投棄を誘っているとの懸念も生まれています。

ごみ（一般廃棄物）の処理は市町村の固有事務で、分別方法や処理料金などは各市町村によって異なります。私たちは、自分たちの居住地においてはごみを捨てる方法を知っていますが、旅行などで他所の地域に出た場合にどのようなやり方で捨ててよいのか知りません。

北海道を旅行する方々からは、旅行途中で口にする地域の食べもの（トウモロコシや海産物など）の生ごみのほか、乳幼児や高齢者のおむつ、旅行に同伴するペットから生じるごみなど、旅行中に発生するごみの捨て場所探しについての切実な要望も聞かれます。

このため、北海道開発局では北海道開発計画調査「エコイノベーション観光地モデル構築検討調査」の一環として、これらの観光行動に伴うごみの実態とその対処方法を検討しましたので、その概要を紹介します。

本調査にあたって多大な協力をいただいた関係機関の皆さまに紙面を借りて感謝申し上げます。

## 1 旅行中におけるごみの発生と旅行者の意向に関する調査

### (1) 調査目的及び調査方法

旅行者による「ごみ捨て」の実態と「ごみ捨て」に関する旅行者の意向を把握する目的で、レンタカー利用者（トヨタレンタカー女満別空港店及び網走店）、ホテル宿泊客（斜里町ウトロ地区の5宿泊施設）、キャンプ場利用者（オートリゾート滝野、苫小牧アルテンオートキャンプ場、マオイオートランド）に対してアンケート調査票を配布し回収した。回収数はレンタカー利用者62件、宿泊客47件、キャンプ場利用者31件。

回答者の道外客・道内客の割合は、レンタカー利用者（道外57名、道内3名）、ホテル宿泊客（道外30名、道内14名）では道外客が圧倒的に多く、反対にキャンプ場利用者（道外2名、道内28名）では道内客が圧倒的に多い。

また、回答者の年齢はレンタカー利用者で約半数が50代以上、ホテル宿泊客、キャンプ場利用者では約2割が50代以上。なお、旅行形態については、すべての調査区分について約7割が個人旅行。

### (2) 調査結果の概要

#### ① 旅行者によるごみ捨ての有無

##### 有無

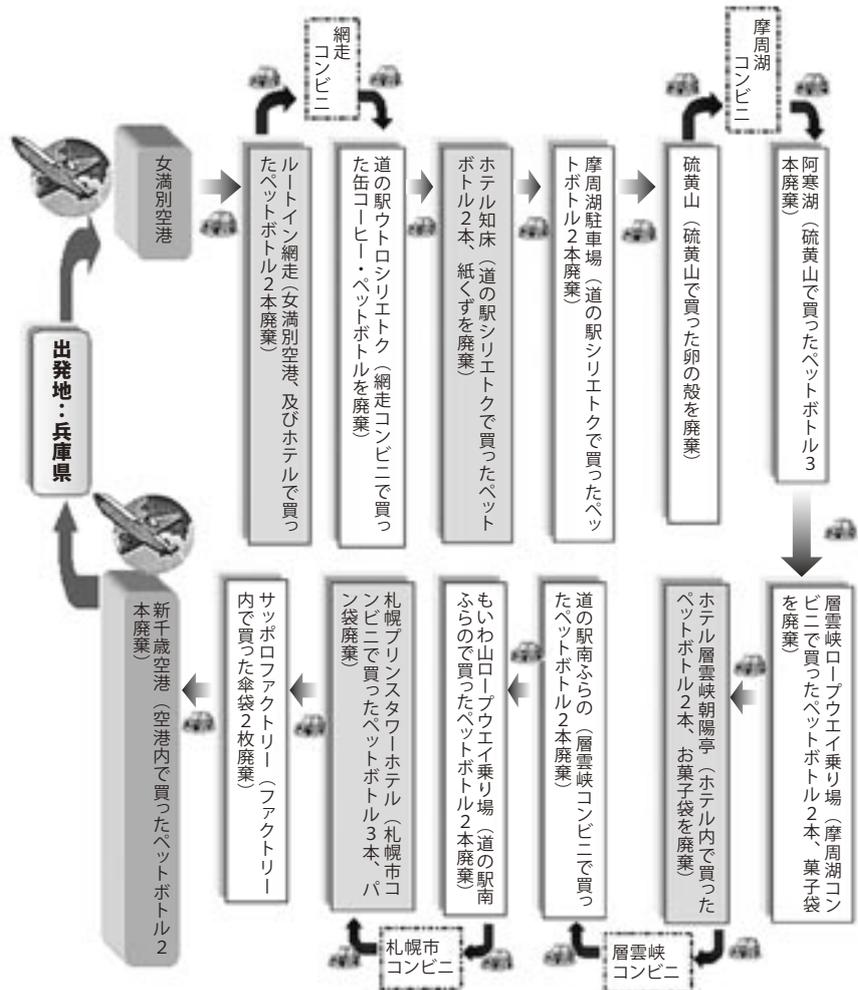
レンタカー利用者で旅行中にごみを捨てた割合は62名中50名で、捨てなかった12名のうち6名はごみとなるものは買わなかったため、4名は家まで持ち帰ったためと回答（2名不明）。同様にホテル宿泊客では47名中39名がごみを捨て、捨てなかった8名のうち3名はごみとなるものは買わなかったため、4名は家まで持ち帰ったためと回答（1名不明）し、キャンプ場利用者では31名中26名がごみを捨て、捨てなかった5名のうち3名が家まで持ち帰ったためと回

答（2名不明）。

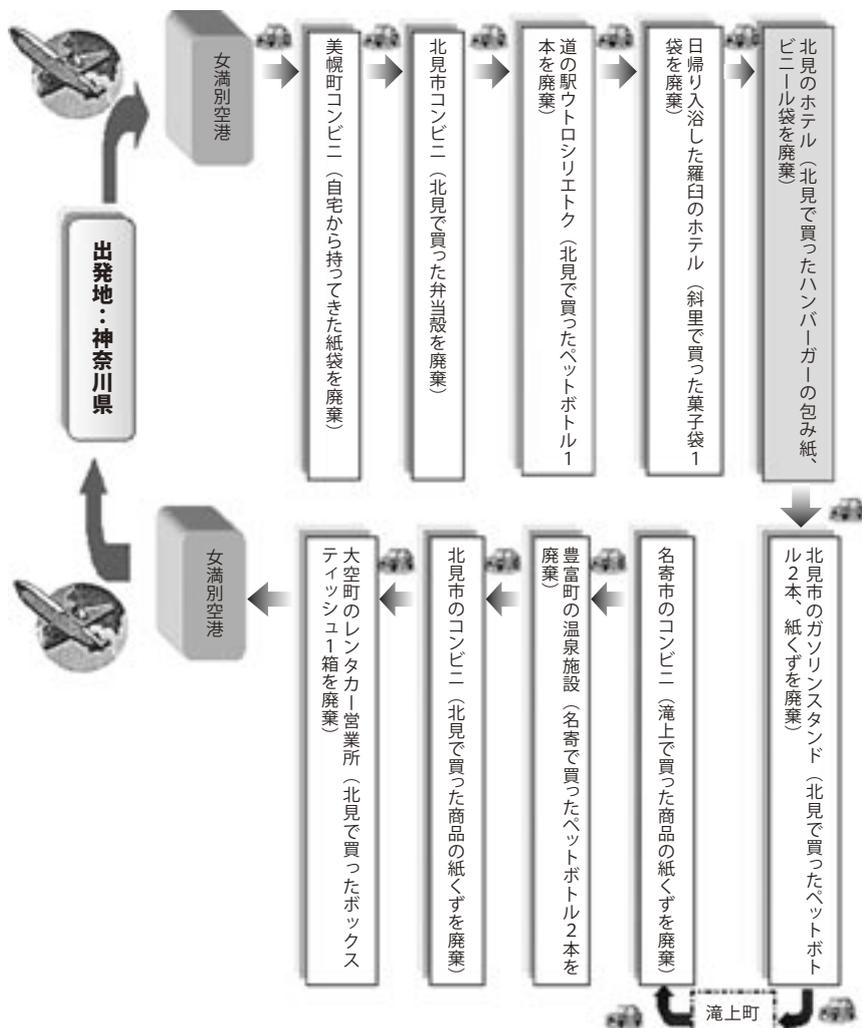
#### ② 旅行者の移動に伴うごみ捨て履歴の事例

アンケート調査に回答された旅行者の移動に伴うごみ捨て履歴について、いくつかの具体例を事例1、事例2に示す。これらの事例に見られるように、旅行者は宿泊施設、観光施設、道の駅、ガソリンスタンド、コンビニエンスストア、レンタカー営業所等の様々な施設に立ち寄りながらごみを捨てている。ごみ捨ては、ごみとなるものを購入した場所とごみを捨てた場所が一致する例は少なく、直前（あるいはさらにその前）に立ち寄った場所で購入したものが次の滞在先や目的地となる施設で捨てられるケースが多い。特にレンタカー移動の場合、車でごみを持ち運ぶことができるため、その日の滞在先となる宿泊施設でごみを捨てようとする意識が比較的強く出ていると推察される。

事例1 道外客・30代夫婦・4泊5日の旅行（レンタカー利用）でのごみ捨て履歴



事例2 道外客・30代家族・2泊3日の旅行（レンタカー利用）での  
ごみ捨て履歴



③排出先別のごみの排出回数

レンタカー利用者及びホテル宿泊客のアンケートから排出先別にごみ捨て回数を単純合計した結果は、表1のとおりであり、ホテル・旅館での排出が突出して多い。

表1 排出先別のごみの排出回数

排出先別	捨てた回数
1 ホテル・旅館	146
2 コンビニエンスストア	27
3 観光施設	26
4 レンタカー	20
4 空港	20
6 道の駅	16
7 ガソリンスタンド	3
8 その他 (Aコープ、病院、高速SA、JR駅など)	20

④ごみの種類別の排出回数

旅行者が捨てたごみの内容は、表2のとおりであり、ペットボトルや包装紙が圧倒的に多く、包装紙の多くが菓子類。

表2 種類別のごみの排出回数  
(レンタカー利用者)

捨てたごみの種類	捨てた回数
1 ペットボトル	94
2 包装紙	45
3 紙くず	27
4 缶	22
4 容器類	22
6 雑誌・新聞	6
6 生ごみ	6
8 ピン	5
9 その他 (衣類、歯ブラシ、紙袋など)	20

(ホテル宿泊者)

捨てたごみの種類	捨てた回数
1 ペットボトル	64
2 包装紙	48
3 紙くず	28
4 缶	27
5 容器類	6
6 雑誌・新聞	4
7 ピン	2
7 生ごみ	2
9 その他 (オムツ、湿布など)	5

⑤旅行中にごみを捨てたかったが捨てられなかった場所と結果的に捨てた場所

旅行中にごみを捨てたかったが捨てられなかった場所と結果的に捨てた場所は、表3のとおりであり、ごみを捨てたかった場所として「道の駅」をあげる声が多い。

表3 ごみを捨てたかった場所と処理方法

ごみを捨てたかった場所	処理方法	結果捨てた場所	捨てたもの
レンタカー	持ち帰り	未回答	未回答
道の駅	他で捨てた	網走市内のスーパー	空き缶 2、空きビン 1
道の駅	〃	川湯のホテル	ペットボトル1本、紙くず
道の駅	〃	十勝川温泉のホテル	ペットボトル2本、紙くず6枚、とうもろこしの芯など
道の駅	〃	阿寒湖の宿	ペットボトル
道の駅	〃	釧路空港	ペットボトル、菓子袋2
道の駅	〃	ホテル	ペットボトル2本、ソフトクリーム紙くず、ティッシュ
道の駅	〃	民宿	ペットボトル1本、ビン1本、ティッシュ
セイコーマート	〃	トヨタレンタカー	ペットボトル2本、おにぎり包装
ローソン	〃	道の駅	各種容器、ペットボトル
ローソン	〃	病院	弁当容器、包装紙
ハイランド小清水	〃	宿	未回答
ガソリンスタンド	〃	レンタカー	プラスチック容器、紙
オシンコシンの滝	〃	サロマのホテル	紙袋、ペットボトル

(ホテル宿泊者)

ごみを捨てたかった場所	処理方法	結果捨てた場所	捨てたもの
道の駅	持ち帰り	自宅	未回答
道の駅	〃	自宅	未回答
道の駅	他で捨てた	セイコーマート	ペットボトル2本
道の駅	〃	ホテル	ペットボトル2本、菓子包装、オムツなど
道の駅	〃	ホテル	ペットボトル2本、缶、牛乳パック、オムツなど
道の駅	〃	知床のホテル	未回答
道の駅	〃	レンタカー	未回答
知床自然センター	〃	知床のホテル	未回答
知床自然センター	〃	セブンイレブン	ペットボトル2本
知床自然センター	〃	セイコーマート	ペットボトル
レンタカー	〃	函館空港	ペットボトル、紙くず、菓子袋
自動販売機	〃	セイコーマート	空き缶
旭山動物園	〃	観光バス	弁当容器2個
能取湖	〃	網走刑務所	未回答

(キャンプ場利用者)

ごみを捨てたかった場所	処理方法	結果捨てた場所	捨てたもの
道の駅	他で捨てた	苫小牧アルテン	未回答

### ⑥ごみ排出の有料化に関する意識

ごみを捨てたかった施設において、地域住民と同じルール（住民と同じ値段でゴミ袋を購入）であればごみの受け入れが可能な場合、どのように考えるか質問したところ、表4の回答が得られた。大量のごみ発生が予想されるキャンプ場利用者は、有料でも利用する意向が強い。一方、レンタカー利用者やホテル宿泊客にあっては、捨てるごみがペットボトルや缶等の資源ごみ、ごく少量の菓子袋等の包装紙の場合がほとんどのこともあり、有料であれば利用しないとする者も半数近くいる。

### ⑦ごみの分別に関する意識

ごみの分別に関しては、分別したくないと答える者はわずかで、地域住民と同じでよいとする回答が最も多い。(表5)

表4 ごみ排出の有料化に関する意識

	レンタカー利用者	宿泊施設利用者	オートキャンプ場利用者
ごみの量・内容にかかわらず有料であれば利用しない	12	12	2
住民と同額の負担であればごみの量・内容しだいでは利用してもよい	15	8	11
分からない	8	7	—

表5 ごみの分別に関する意識

	レンタカー利用者	宿泊施設利用者	オートキャンプ場利用者
地域住民と同じでよい	35	26	18
燃える・燃えないの簡単な2区分が良い	18	16	4
分別したくない	1	1	—

## 2 「道の駅」等で旅行者の「ごみ」を引き取る社会実験

### (1) 調査目的及び調査方法

旅行者の排出するごみを試行的に引き受けることを通じて、問題点などを検証する目的で知床地域と洞爺湖地域の2地域（1市11町）の17か所の道の駅等で、旅行者が排出するごみを有料で引き取る拠点（エコステーション）を、昨年6月1日から7月15日までの間設置し、旅行者へのアンケートやごみの引き取りを担当した実施事業者

や関係市町へのヒアリング調査を行った。なお、アンケートの回収数は72件であった。

ごみの引き取りは、各市町等の廃棄物処理担当者と調整の上、それぞれの引き取り場所でなじみやすい方式を採用した。（知床地域では各市町の家庭用ゴミ袋等を観光客に購入してもらう方式が多く、洞爺湖地域では環境美化協力金を支払ってもらう方式となった）

### (2) 調査結果の概要

#### ①利用状況

期間中のごみ袋の回収枚数は計225枚、協力金による利用件数は計50件で、各市町や受入れ施設が想定していたほど利用件数は多くなかった。利用者はキャンピングカーやワゴン車で道内を移動して旅行

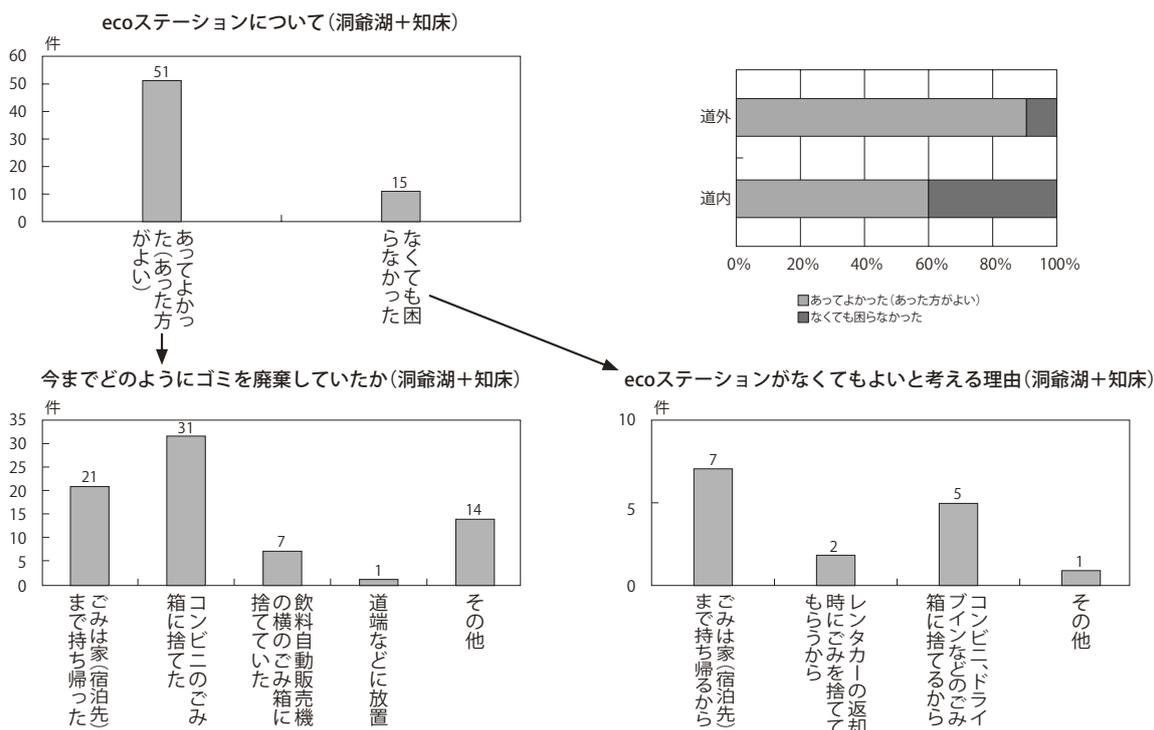


図1 エコ・ステーションの必要性に関するアンケート結果

する長期滞在型の観光客が多かった。回収したごみの種類としては、燃えるごみが多かったが、ペットボトル、缶等の資源物については、少量であれば施設のサービスとして無料で引き取るなどの対応をしていたことから、実際の観光ごみとしては、飲料の空き容器が多かったものと考えられる。なお、回答者の約3割が50代、60代以上の道外客で、1週間から1か月以上も夫婦で道内ドライブ旅行をしており、特にこのような層がごみの捨て場所に困っていることがうかがえた。

②エコ・ステーションの必要性

特に道外客の9割がエコ・ステーションが必要と回答している。(図1)

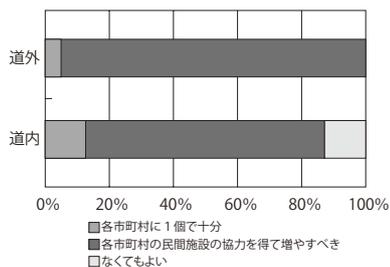
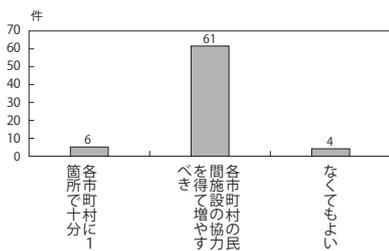
③エコ・ステーションの設置数に関する意向

エコ・ステーションの設置数については、回答者の9割が「民間施設の協力を得て箇所を増やすべき」と回答した。(図2)

④費用負担に関する意向

回答者の約8割がごみの排出に当たって「地域住民と同程度以上の費用負担」が妥当と回答した。(図3)

ecoステーションの設置数(洞爺湖+知床)



ゴミの回収料金について(洞爺湖+知床)

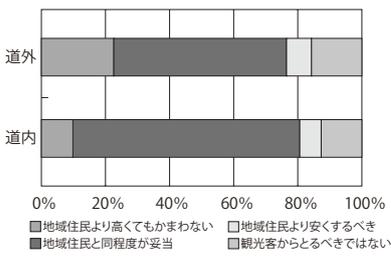
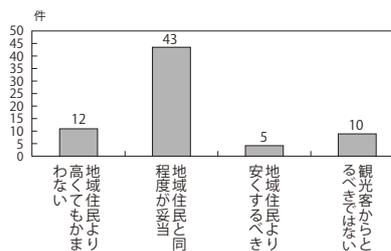


図2 エコ・ステーション設置数に関するアンケート結果

図3 ごみの回収料金に関するアンケート結果

### ⑤旅行者からの意見

アンケート調査表の自由意見欄には、「全道に広げてほしい」「持ち帰れないので有料でも処理してくれるとうれしい」「長期旅行者にとっては助かる」「このような方法を待ち望んでいた」など、道外観光客を中心にこの取組を高く評価する意見が多数寄せられた。

### ⑥エコ・ステーション設置に参加した市町や施設からの意見

市町や施設へのヒアリングにより聴取した取組に対する意見をまとめると、以下の結果であった。

- 利用実績が少なかったことから、利用に伴う手間や負担感は少なかった。
- 長期旅行者を中心にゴミ捨てニーズは高い。
- 社会実験や観光ごみの回収の手法について、周知不足により観光客に十分認知されていない点が問題点として指摘されている。施設における取組に関する看板やポスター、ステッカー、パンフレット配置場所など、施設内での周知の仕方について工夫する必要がある。
- 知床地域のごみ袋販売は、キャンプ客やキャンピングカーなどで車中泊しながら道内を回る旅行者など大量のごみを排出する観光客の利用には適していたものの、少量ごみを排出する観光客のニーズにはマッチしていなかった。ただし、少量のごみ（特に資源物）であれば、施設のサービスとして無料で引き受けているケースが多かった。
- 洞爺湖地域の協力金方式では、観光客に対してごみ引取りに伴う協力金支払いの趣旨や、ごみの量による料金の差を説明する必要性が生じ、観光客への説明の手間と観光客の協力金への支払いに対する負担感が強いことが課題である。
- ごみの分別は観光客が行うことになっていたが、自分の住んでいる地域の分別ルールでごみを出すため、施設職員が対応しているケースがある。
- 全道的、あるいは道の駅による広域的な取組にしていった方が観光のPRにつながり、観光客の利便性からも効果的であり、観光客に分かりやすいように広域で統一した共通の受け入れのルールや処理の仕組みが必要との意見がある一方、自治体の基準との整合性や分別の手間が懸念されている。
- 観光ごみ回収の取組に対して、ごみの持ち帰り運

動とのギャップを指摘する意見や観光関連事業者など民間の立場からの取組を求める意見もある。

- 各施設や各地域によってごみ処理のコスト負担に対する観光客の理解度に差が感じられた。環境意識の高い観光客が訪れる観光地では、ごみ処理に対する費用負担に好意的な反応が見られた。また、初めて取り組んだ箇所と比べ、既に先行的な取組が行われていた箇所では、費用負担への抵抗感が少ない傾向にある。
- エコ・ステーションの協力施設においても、観光客のごみの問題で課題を抱えている。大型バスでの移動におけるトイレ休憩時のごみ廃棄問題のように、問題の解決にあたっては、観光関連事業者（旅行代理店、バス会社、レンタカー等）の協力が必要と考える。

### 3 これからの観光ごみの取組に向けて

今回の社会実験での取組を契機として、実験終了後も継続的にごみの受け入れを実施する道の駅や営業時間外のトイレ利用時のごみの受け入れ方法を検討する道の駅などの新たな動きも生まれています。社会実験に協力した市町や施設の多くから、観光客（特に道外客）の満足度向上、放置ごみの散乱防止、受け入れ施設のPR・魅力向上などの観点から今後も継続的に取り組んでもよいとする意向が示されていることも踏まえ、次年度についてはさらに広域的な取組を関係機関と協力して実施することを検討しています。

人が集まれば必ずごみが発生します。ごみの減量化や持ち帰りを基本としつつも、旅行者が地域住民と同様のルールを守った上で、ごみを捨てられる場所を数多く確保することが、きれいな北海道で気持ち良くお客様をお迎えするとともに、私たち道民にとっても大切な環境を保全するために重要なことです。

ごみの分別方法等の処理方法は各市町村毎に異なりますが、ユニバーサルデザインの観点から旅行者に対してごみ捨て場所を提供するとともに、旅行者にも住民と同様に環境保全に一定の役割を担っていただく、北海道のエコ・スタンダードを確立することを目指しての関係機関や団体が連携した取組に期待しています。